

本講義資料のご利用にあたって

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。


著作権が東京大学の教員等に帰属する著作物については、非営利かつ教育的な目的に限り複製および再配布することができます。

ご利用にあたっては、以下のクレジットを明記してください。

クレジット：

UTokyo Online Education 学術フロンティア講義 2025S 王 欽

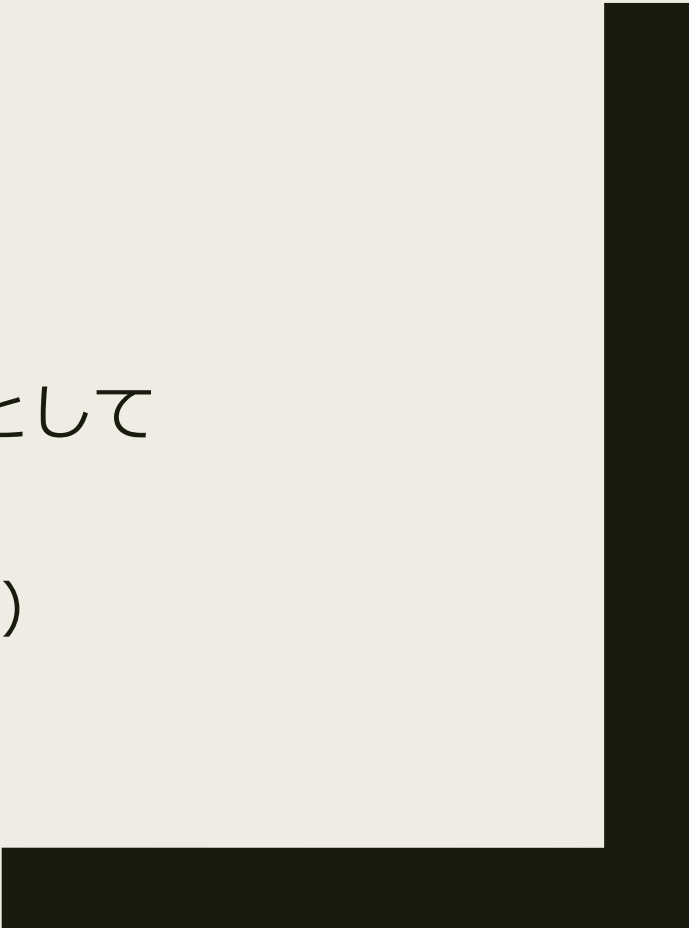




教養とは何か

—レオ・シュトラウスを手がかりとして

王 欽
(東京大学大学院総合文化研究科)





Leo Strauss (1899 – 1973)

- 一般教養教育は、保守主義的教育の反対物ではなく、非自由主義的（illiberal）教育の反対物である。本来の意味でリベラルであるとは、寛大さ（liberality）という徳の実践を意味する。あらゆる徳がその完全な姿にあっては互いに不可分であるというのが本当なら、真にリベラルな人と真に有徳な人とは同一である。（レオ・シュトラウス「序文」、viiiページ）
- 古典的政治哲学は、普遍同質的な国家に対して、一つの実質的な原理を対置した。古典的政治哲学は次のように主張する。人間にとって自然的である社会とは都市、すなわち一目で容易に捉えることのできる社会、あらゆる人間の自然的（つまり、顕微鏡や望遠鏡によって見るのではなく、肉眼で見える場合の）知覚能力に見合った、閉じた社会である、と。かしこまった言い方をせずにいっそう重要なことを言えば、古典的政治哲学は以下のように主張するのである。すなわち、これまでに存在してきた、あるいは今後も存在するであろうあらゆる政治社会は、知識によっては置き換えられえない独特の根本的な意見に立脚した社会であり、したがって必然的に特殊なあるいは個別を尊重する社会である、と。（レオ・シュトラウス「序文」、viii–ixページ）

- いま保守主義という名で流布しているものの多くは、結局、今日の自由主義と、それどころか共産主義とすら共通の根を有している、と。このことが事実であるということは、近代性の起源、つまり一七世紀に生じた前近代の伝統との断絶にまで、あるいは、古代人と近代人との抗争の時期にまで遡れば非常にはつきりとしてくるであろう。（レオ・シュトラウス「序文」、viiiページ）
- 一般教養教育とは、文化のなかでの教育、あるいは文化に向けての教育である。一般教養教育が最後に生み出すものは教化された人間である。「文化Culture」（cultura）はもともと農耕（agriculture）、すなわち、土を世話し、その自然に応じて土壌を改善するような仕方で土を耕し、そこから生み出されるものを養育することを意味した。そこから派生して、今日では主として、「文化」は、精神の本性に応じた仕方で精神の世話をなし、精神に生まれつき備わった能力を改善することを意味している。（レオ・シュトラウス「一般教養教育とは何か」、三ページ）

- 文化は、前もって既に全体として「自律的」であり、卓越した創造物、人間精神の「純粋な産物」なのである。この見解をとれば、「文化」が教養開化されるものをつねに前提とすること、文化（Kultur）とはつねに自然の形成開化（Kultur）であることが、忘れ去られる。自然の形成開化の根源的な意味は、文化が自然な素質を形成開化して、大地であれ人間精神であれ、自然を注意深く保護育成する、ということであり、それと同時に、文化は、自然そのものが与える指示に従うものだ、ということである。しかし、このことは、自然に対する服従を通して、自然を征服する、という意味でもある（ベーコンの言葉によれば、「服従しつつ征服すること（parendo vincere）」）。この場合、文化は、自然を誠実に保護育成することというよりは、むしろ自然に対する厳しい闘い、策略を用いた闘いである。文化が自然の保護育成として理解されるか、自然との闘いとして理解されるかは、自然がどのように理解されるかに左右される。つまり、自然が模範となる秩序として理解されるか、征服されるべき無秩序として理解されるかによる。しかし、文化がどんなふうに理解されようと、「文化」とは、どんな場合でも、自然の形成開化（Kultur）である。（レオ・シュトラウス「カール・シュミット『政治的なものの概念』への注解」、ハインリヒ・マイアー『シュミットとシュトラウス』所収、一三三ページ）

- もしわれわれが「文化」という語の今日的用法を本来的な意味と対比すれば、こんなふうなことを言う人がいるかもしれない。菜園を耕作するということ（cultivation）は、その菜園を、辺り一面に無造作に投げ捨てられた空かんやウィスキーの空瓶、いろいろなことが書かれた使い古しの紙で散らかすことにあるのかもしれない、と。（レオ・シュトラウス「一般教養教育とは何か」、五ページ）
- 土がその耕作者を必要とするのと同じように、精神は教師を必要とする。しかし、教師に出会うのは農夫に出会うほど容易ではない。教師自身が生徒であり、また生徒でなければならない。だが無限の後戻りというようなものはありえない。つまり、最後には、立場を替えて生徒となることのない教師が存在するに決っている。このような立場を替えて生徒となることのない教師は、偉大な精神の持ち主、あるいは、そのような重要な事柄で曖昧となることを避けるために言い換えれば、最も偉大な精神の持ち主である。（中略）実際のところ、生徒たちが、どの程度習熟するかはともかく、立場を替えて生徒となることのない教師、つまり最も偉大な精神の持ち主と出会いを持つのは、ただ偉大な書物を通してだけである。したがって、一般教養教育とは、最も偉大な精神が後世に残した偉大な書物を、しかるべき注意を払って研究することにあるということ、つまり、いっそう経験を積んだ生徒が、初心者も含めあまり経験を積んでいない生徒を補佐して行われる、偉大な書物の研究ということになろう。（レオ・シュトラウス「一般教養教育とは何か」、三―四ページ）

- 最も偉大な精神の人たちのすべてが、最も重要なテーマに関して、必ずしも同じことをわれわれに語っているわけではない...最も偉大な精神の人たちの共同体も、不協和によって、しかも様々な種類の不協和によって、引き裂かれているのである。（レオ・シュトラウス「一般教養教育とは何か」、四ページ）
- 「一般教養教育は文化のなかでの教育である」。それはいかなる文化のなかでの教育であろうか。われわれの答えは、「西洋」の伝統という意味での文化、というものである。（レオ・シュトラウス「一般教養教育とは何か」、四ページ）
- われわれがインドや中国の最も偉大な精神の持ち主たちに耳を傾けることを妨げているものは、単なる不幸な宿命、つまり、われわれが彼らの言語を理解しないということ、そして、われわれにはあらゆる言語を学ぶことなどできないということしかない。（レオ・シュトラウス「一般教養教育とは何か」、十ページ）

- この点にまで立ち至れば、どうやら話がずれてしまった気がする（we have lost our way somehow）。いまここで（here and now）、一般教養教育は何を意味しうるか、という問いを立てるところから、改めて出発し直そうと思う。（レオ・シュトラウス「一般教養教育とは何か」、五ページ；一部改訳）
- 民主主義とは、すべての大人たちあるいは大多数の大人たちが有徳的な人々であるような体制であり、そして徳は知識を必要とするがゆえに、すべての大人たちあるいは大多数の大人たちが有徳的であるとともに賢明でもあるような体制、言い換えれば、すべての大人たちあるいは大多数の大人たちがその理性を高度に発展させているような社会、すなわち最も合理的な社会のことであると言われている。一言で言えば、民主主義とは、普遍的貴族制（universal aristocracy）にまでおし広げられた一つの貴族制であることを意味しているのである。（レオ・シュトラウス「一般教養教育とは何か」、六ページ；一部改訳）

- 哲学者は、彼自身が賢明だけでなく、唯一真なる王であるといわれている。彼は、人間の精神に可能な限りでの卓越性を余すところなく、最も高度に所有しているといわれている。ここからわれわれは、以下のような結論を引き出してこなければならない。すなわち、われわれは哲学者ではありえない、—われわれは最も高度な形の教育を手にすることはできない、という結論である。自ら哲学者であると名乗っている多くの人々に出くわすという事実には、惑わされてはならない。というのも、これらの人々は、おそらく実際に便利だという理由から必要とされていると思われる、いい加減な表現を用いているからである。しばしば、彼らは、哲学科の一員であるということを言っているだけなのである。（レオ・シュトラウス「一般教養教育とは何か」、九ページ；一部改訳）